



新時代のものづくり基盤委員会

委員長 野間口 有

三菱電機
取締役会長

1940年鹿児島県生まれ。65年京都大学大学院理学研究科修士課程修了後、三菱電機入社。

1995年取締役、97年常務取締役、2001年代表取締役専務取締役、2002年代表取締役取締役社長、2003年代表執行役執行役社長取締役、2006年取締役会長に就任。現在(独)産業技術総合研究所理事長。

2007年3月経済同友会入会。2008年度新時代のものづくり基盤委員会委員長。

副委員長 (役職は3月26日現在)

荒川 亨
(ACCESS 最高経営責任者)

金丸 建一
(リコー 常務執行役員)

遠山 明
(旭硝子 常務執行役員中央研究所長)

御立 尚資
(ボストンコンサルティンググループ 日本代表)

山口 千秋
(トヨタ自動車 常勤監査役)

横山 隆吉
(不二工機 取締役社長兼グループCEO)

委員69名

ものづくりの「クオリティチェーン」は世界に通用する新しいコンセプト

形あるモノだけでなく経営の品質も忘れてはいけない

昨年5月に提言「世界から信頼されるものづくりを目指して」を発表後、当委員会では、ものづくりの基盤として欠くことのできない「品質」に焦点をしばって議論を重ねてきました。しかし、9月のリーマンショック以降、金融システムの不全が实体经济にも大きな影響を及ぼし、世界同時不況という深刻な状態に陥りました。足元の課題に振り回されがちなそんな状況にあって、「品質」をどう考えるべきか——委員会でもまさに、さまざまな意見が出されました。

また、国内ではここ数年、耐震偽装や食品偽装といった事件や事故が多発し、日本のものづくりを支えてきた「品質」そのものに深い影を落としています。そこでもう一度、原点に立ち返り、製品といった形あるものだけでなく、経営や倫理なども含めた、広い意味での「品質」を考えなくては

いけないという結論に達したのです。

つまり、製品やサービスはもちろん、その機能やコスト、お客様に対する企業倫理、環境への取り組みなどの要素も含む関数として「真に確保すべき品質」を定義しました。新しいものづくりは、時代の変化に伴って常に新しい要素を加えながら、広義にとらえた「品質」の確保が必要であり、そのうえで、日本のものづくりの強みを生かした付加価値を追求しなければいけません。

「クオリティチェーン」という言葉で一つにまとまった委員会

今回の提言の中でうち出した「クオリティチェーン」という言葉は、「ものづくりのすべてのプロセスを通じて品質が確保される連鎖」を意味しています。これは、経済同友会ならでの多種多様な企業から集まった委員69名が、まさに忌憚のない意見を出し合ったすえに導き出されたもの。こ

の「クオリティチェーン」という言葉が発案されたとたんに、全員の認識がスッと一つにまとまりました。いわばこれは委員会が苦労のうえにたどり着いた共通認識であり、統一したコンセプトといえます。

企業、市民、行政、アカデミアが一体となって、この「クオリティチェーン」の実現に取り組むことで、人づくりの役割も果たし、新しい市場と社会の構築に寄与できると期待しています。もちろん、価値提供者の自主チェックに加え、市民の厳しい眼によるダブルチェックが機能することがポイントです。まずは企業が積極的にこれを推進し、理解の輪を広げていくことが大切でしょう。

民間主導のオープンで健全な新しい市場と社会の実現を目指す「クオリティチェーン」は、日本だけでなく世界にも通用する新しいコンセプトであると確信しています。

▶ 新時代のものづくり基盤委員会の提言
17-18ページに掲載